

< 研究成果の紹介 >

法面植栽に向くグラウンドカバー・プランツ苗生産における用土別の施肥法

花植木センター

1. 成果の内容

緑化植物生産は、特定の種類に限らず多種種類の植物を栽培する傾向が強くなっています。中でも、地面を覆う目的で利用されるグラウンドカバー・プランツの需要は急激に伸び、特に法面緑化への利用は、土壌浸食防止、雑草発生の抑制、景観の向上等環境保全の面から注目されています。

このため、法面緑化に適する植物4種類を選定し、これらを効率的に生産するための管理法を検討しました。

その結果、これらの種類について効率的なコンテナ生産のための基本土壌別の施肥法についてみると、ア・クトセカでは赤土及び山砂用土共に被覆複合肥料270が優れ、それぞれ15cmポット当たり総N成分量3g、2～3gが適正量でした。

コグマザサは、赤土用土の場合同ポット当たり緩効性化成肥料1g、または被覆複合肥料270の2g施用が適し、山砂用土では同ポット当たり被覆複合肥料270の1g施用が適しています。

リュウノヒゲは、赤土用土の場合同ポット当たり緩効性化成肥料1g、被覆複合肥料270の1～2gの施用が適し、山砂用土では緩効性化成肥料2g、被覆複合肥料270の1gが適しています。

ヘデラ・カナリエンスは、赤土用土の場合10.5cmポット当たり被覆複合肥料180の1gが有効で、山砂用土では緩効性化成肥料の2～3gが適しています(表)。

2. 技術の適応効果と適応範囲

法面植栽に向く有望グラウンドカバー・プランツ類について、生産場面での用土別適正な施肥法の基準として利用できます。

グラウンドカバー・プランツのコンテナ生産農家に適応できます。

3. 普及・利用上の留意点

供試用土は、赤土を基本とした場合はpH4.2、山砂の場合はpH4.4です。

(鎌田 正行)

表 有望種類の基本土壌別の施肥方法

植 物 名	基本土壌	施肥方法	増加芽数	株重量
ア・クトセカ	赤土	被覆複合肥料270 3g	3.3	98.4g
	山砂	被覆複合肥料270 2g	4.3	101.6
	山砂	被覆複合肥料270 3g	4.3	97.7
コグマザサ	赤土	緩効性化成肥料 1g	57.5	65.0
	赤土	被覆複合肥料270 2g	49.7	52.0
	山砂	被覆複合肥料270 1g	47.7	43.0
リュウノヒゲ	赤土	緩効性化成肥料 1g	13.7	48.3
	赤土	被覆複合肥料270 1g	14.0	46.0
	赤土	被覆複合肥料270 2g	12.0	50.7
	山砂	緩効性化成肥料 2g	14.7	53.0
	山砂	被覆複合肥料270 1g	18.7	56.0
ヘデラ・カナリエンス	赤土	被覆複合肥料180 1g	4.3	50.8
	山砂	緩効性化成肥料 2g	5.5	55.0
	山砂	緩効性化成肥料 3g	7.1	60.0

注) ヘデラ・カナリエンスの増加芽数は蔓長増加比

用土は基本土壌2:ピートモス1:パ・ライト1

施肥方法は成分量で表示。

緩効性化成肥料は、2～4回の分施用合計。

ア・クトセカ、コグマザサ、リュウノヒゲは15cmポット当たり、

ヘデラ・カナリエンスは10.5cmポット当たりのN成分量。